

河川におけるアユの生態

アユを守る意味

天然アユ保全研究会 / たかはし河川生物調査事務所
代表 高橋勇夫

1 ナワバリ行動を考える

アユを特徴づける行動に“ナワバリ形成”があり、この特徴を抜きにしては友釣りそのものが成り立たない。しかし、アユのナワバリとは具体的には何なのだろうか？

というのも、川に潜って観察していると黄色の紋が鮮やかなアユに出会う。これまでこの黄色の紋はナワバリ個体のトレードマークのように思われてきた。しかし、3月頃、体長が10cmにも満たない「黄色の紋が鮮やかなアユ」に出会うことがある。彼らは群行動は取らないけれども、他者を排除する「追い行動」もほとんど見せない。こういった黄色いけれど追い行動をほとんど取らないアユは普通にいることから考えると、黄色い紋とナワバリ行動には密接な関係はないのかもしれない。

もう一つ。アユのナワバリは自分の餌を独占するための行動であると考えられている。たしかに、他のアユやオイカワがナワバリ内の餌を食べようとすると、排除することが多いが、ナワバリ内で盛んにコケを食べるボウズハゼを排除するのは未だに一例も観察できない。ボウズハゼがアユを攻撃することは頻繁にあるにもかかわらずである。

こうしてみると、アユの特徴のように考えられているナワバリ行動にはまだ分かっていないことが随分ありそうに思える。

2 天然アユを取り戻す活動

高知県の河川は一昨年、昨年と2年続きの極端な不漁にあえいだ。その主な理由は天然遡上の減少である。その中で物部川（高知県一荒廃したアユ河川と言われてきた）だけは遡上が多い。とくに昨年は「何十年ぶり」という大量遡上があり、「放流0匹」で解禁を迎えることができた。

漁協では、8年ほど前から「放流に偏った増殖策」に見切りをつけ、様々な保護活動を行ってきた。具体的には、産卵場の造成や保護区の設定、禁漁期の延長といった漁場管理が中心で、毎年その効果を検証することで技術が大きく向上した。

今、物部川漁協では濁水対策、森林保全、流域への啓蒙といった、「こんなことも漁協がするの！」と驚かれるようなことまでやり始めた。まさに河川環境保全である。天然アユを増やすという取り組みを続ける中で、流域の環境を保全することの重要性に気がついたためである。

3 アユを守る意味

全国各地でアユの減少が目立ち始めた。冷水病の蔓延、河川環境の悪化（水質汚濁、水量の減少 etc）、海域での稚魚の減耗等々、様々なことが原因としてあげられている。

これらに加えて、私は、天然のアユを「増やそう」という意欲とそれを実現するための具体的な方法 — その一方または両方 — が欠落していたのではないかと考えている。そしてこの「意欲」と「具体的な方法」こそが、これから私たちが自然とのつき合い方を考えるうえで不可欠なものではないだろうか。

物部川漁協の「アユを取り戻す」という取り組みの中から、新しい自然とのつき合い方が少しだけ見えてきたような気がしている。